

山家宿(1)——宿場の町並み

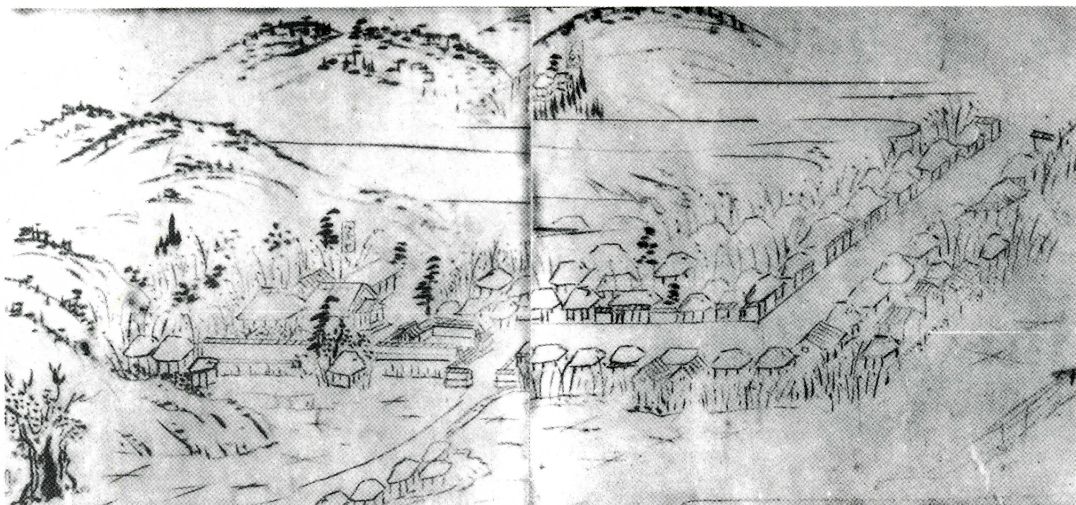


▲昭和30年頃の山家宿上町。



▲上町にのこる「えびす石神」





▲往年の山家宿を描いた絵図。

(近藤思川著『筑前六宿 山家風土記』より)

山家宿^{やまやしゆく}上町のほぼ中央に「おえべすさま」とよばれる恵比須石神^{えびす}がまつられています。この石神の裏面には、山家の宿場ができた由来が彫り込まれています。今ではもう消えかかかっていて、文字のあとがかすかにわかる程度ですが、注意深く見ると、次のように書かれています。

当町初建之事

去慶長拾六年辛亥十月上旬播州之住人
桐山丹波守創造□□□刻一基之石像為
国家安寧斯地長久□□
時寛永拾年□□□□ 志方彦太夫立之

この銘文の意味は、

この町がはじめて建てられたこと。去る慶長16年(1611)10月上旬に播磨国(現在の兵庫県の大部分)の出身である桐山丹波^{きりやまたんば}がこの宿場を建設した。その記念にこの一基の石像を刻み、筑前国の安全と山家宿の繁栄を祈る。時に寛永10年(1633)、志方彦太夫これをたてる。

ということです。

桐山丹波は山家宿の初代代官となり、寛永2年(1625)にこの地で亡くなりました。その墓は代官所の裏山の城ヶ尾という所にあります。志方彦太夫は桐山丹波の家臣です。

さて、宿場のなかの道はカギ型に折り曲げられています。これは防衛上、大部隊が一気に駆け抜けられないようにしたものです。各家は間口が狭く、奥行きが長い宿場独特のつくりです。宿場の入り口と出口には石垣の上に土壁瓦葺の塀が築かれており、これを構口^{くち}といいます。筑前六宿(原田・山家・内野・飯塚・木屋瀬・黒崎)には藩主が建てた御茶屋と民間の町茶屋があり、大名の休泊所になっていました。町茶屋には一般の旅行者も泊まり、特に下茶屋(薩摩屋)は大阪の浪花講の指定旅館にもなっていました。また、通行人の荷物輸送のために問屋場^{といやば}が置かれ、かごや馬の世話をしました。大名の参勤交代があるときは、郡屋(郡の役人たちの集会所)に宿役人や村役人などが集まって村人総がかりで人馬の輸送にあたりました。